

< 書 評 >

ハリウッドの参戦——戦時中の映画に政治・経済・戦争宣伝が与えた影響
クレイトン・R・コップス & グレゴリー・D・ブラック
カリフォルニア大学出版局 1990

書評： タダシ・ハマ（日本語訳：「史実を世界に発信する会」）

第二次世界大戦中のハリウッド映画を検証し、制作担当者がどのような意図を以ってこのような映画を作ったかを研究すれば、米国史の一端が明らかになって来る。そして、それを行ったのが、オーバーリン大学の元歴史学教授であり社会活動家であるクレイトン・コップスおよびミズーリ大学カンザスシティ校教授のグレゴリー・ブラックだった。フランクリン・D・ルーズベルトは、プログローバリズムと反ファシズムを宣伝するために、政府がハリウッドを管理しようと画策した。本書はその陰謀に焦点を当て、ルーズベルトとハリウッドがどのように共謀していたかを解明している。

「陰謀を画策する政府とハリウッドは、蜜月関係に入った。政府はハリウッドを利用できると考えた。しかし、あんまり宣伝色が濃くなると、映画が面白くなってしまい、逆に宣伝効果が薄れるという皮肉な結果を生みかねない。また、一方では、制作側は協力する意欲は満々だったが、そのために利益を犠牲にするのはごめんだという態度だった。」

当時、米国の国民は生活必需品を買うにも制限があった。だからこそ、ハリウッドを仕切るエリート層は、二つ返事で戦争に協力することになった。しかも、莫大な報酬を得たのだから、笑いが止まらない。彼らは戦争情報局（or 戦時情報局）に懐柔されたというよりは、逆に利用したという方が適切かも知れない。海外に映画を輸出し、世界中の観客から金を掠め取るためには、当局の認可が必要だったからだ。

第二次世界大戦の以前には、「（ハリウッドの）収入の4割は海外から得ていた」世界中にハリウッド映画のファンがいるのだから、ルーズベルトはハリウッドの力を借りて、宣伝のために利用しようとした。戦争の間中、「軍が進駐して、戦火が収まるとすぐに」、解放地域にハリウッド映画を持ち込むことができる——ハリウッドは、作品を国外に進出させ、世界中の人々から金を巻き上げようと考えてほくそ笑んだのだった。

共著者（コップスとブラック）は、「情報がきちんと与えられなければ、民主社会は存立できない。従って、米国人はプロパガンダというものを疑惑の目で見る」と主張する。さらに、「全面戦争を遂行するためには、大衆を動員することが必要になる。そこで、政府は、軍と民とを問わず、士気を維持するためには、プロパガンダが不可欠だと考える」とも言っている。したがって、共著者にとっては、国家の危機に際しては、言論の自由などというものは、贅沢品になるから、犠牲にしても構わないと考えるのである。今や、フェイクニュースと情報操作と大衆検閲の時代になってしまった。ルーズベルトは、草場の蔭から、さぞかし喜んでのことだろう。ルーズベルトは、「世論に影響を与え、ニュースメディアを『操作』したという点で、「当時としては完璧なメディア政治家」だった。ルーズベルトの世界戦略に反対する者たちもいたが、「ルーズベルトの画策によって、参戦に反対する人々は、メディアからほとんど取り上げられないようになってしまった」。さらに、ルーズベルトは、「連邦捜査局（FBI）を始めとする連邦政府という装置をつかって、反対派にいやがらせをし、その信頼度を落とすように働きかけた」。ルーズベルトは「公的なプロパガンダ機関」を創設し、「行政命令」を頻発して、「世論に影響を与える」ことを画策した。言い換えれば、通常の手続きを必要としない大統領令という手段に訴えたのであり、これは「民主的な市民社会を危うくする」ものと言わなければならない。今日では進歩主義者とグローバリストは、ルーズベルトがグローバルなビジョンを持っていたということで、彼を称讃している。しかし、彼は、政府とメディアを悪用して、反対派を抑圧し、自分の野心を喧伝したのに、それについて指摘する声はほとんど聞かれない。本書は、ルーズベルトの手口をチラリと垣間見せると、すぐにカーテンを閉じてしまう。何と言っても、ルーズベルトは世界をファシズムから救ったのであり、リベラルにとっては、「結果よければすべてよし」ということになる。プロパガンダの名人であるルーズベルトの陰謀について、もっと詳しく知りたい人は、他の書に当たる必要がある。

とはいえ、その結果、ハリウッドは自由民主主義とグローバリズムを桃源郷であるかの如くに描き出し、ファシストを嘲笑する映画を次から次へと世に送り出した。そして、一番愚弄されたファシスト国家が日本だったのだ。まず最初に、共著者は、戦時情報局（OWI）が「真実」を曲げてまで、「ヘイト・プロパガンダ」を喧伝することは避けていた、と主張する。その真実というのは、OWI とルーズベルトが決めた真実だったのである。「ヘイト・プロパガンダ」をするまいという OWI の決心は、まもなくどこかへ消えてしまった。日本

を題材にした映画は、日本人の性格をそのままに描き出そうという努力はしていなかった。日本が達成しようとしていることを説明しようとしなかった。日本人は名前もなく、顔もなく、言葉も持たない存在のままだった。そればかりでなく、共著者は「日本人を『ジャップ』とか『イエロー・モンキー』とか『ニップ』とか『目の吊り上がった鼠』などという蔑称で罵っている場面がない映画は極めてまれな映画」をとりあげている。映画のタイトルは「リトル・トーキョー・USA」というのであるが、冒頭に、15000人の日系米国人がスパイ活動に従事していたという解説がある。¹ 物語の場面はロサンゼルス。刑事たちが破壊活動の容疑をかけられたさまざまな日系人を逮捕する様子が描かれている。刑事とその上司ともう一人の警察官が勾留されている容疑者を殴打するのだが、それは全面的に人種差別の意識から出た暴力だった。日本を描いたハリウッド映画は他にもあったが、いずれも、日本人の「裏切り」と「残虐性」に焦点を当てている。ところが、ドイツ人の場合は、それとは対照的に、ナチスとは違う上品な人間として扱われていることが多い。

米国とその自由民主主義のイデオロギーをできるだけ肯定的に描き出すためには、米国の歴史を改竄する必要があった。たとえば、原本にあった黒人奴隷や黒人の召使などの存在は抹消されていた。また、第二次世界大戦の戦闘場面では、黒人兵士が白人兵士と並んで戦っている。ところが、実際には、米軍はこの時代にはまだ、部隊は人種別になっていたのだ。(黒人部隊、日系部隊等々) 詐欺と言われようと、粉飾と言われようと、ハリウッドは「肌の色や信条の違いはあっても、団結して米国のために戦う」という虚構を作り出す必要があったのだ。

¹ 「リトル・トーキョー」の注はこうなっている：日系人が、ルーズベルトの行政命令によって、ロサンゼルスのリトル・トーキョーから強制的に移送された時、リトル・トーキョーの跡地に入って来たのは、白人居住区域には入れない黒人たちだった。黒人の経営するビジネスが日系人のビジネスに取って替わり、この区域はブロンズフィルと改名された。そして、犯罪と疫病で有名になってしまった。解放されて戻って来た日系人は、財産の返還を要求した。黒人と日系人は少数民族の市民権に関して協力できる余地はあったが、一方では、ライバルとして相当な緊張状態を作り出してもいた。ナターシャ・バーナー (2016-2-23) 「日系米国人とアフリカ系米国人は、過去のいきさつにこだわらずに、協力して、自分たちの権利を要求している」 (<https://www.pri.org/stories/2016-02-23/despite-their-history-japanese-americans-and-african-americans-are-working>)

ハリウッドは長年にわたって、米国や世界の世論に影響を及ぼして来た。本書はその歴史のほんの一端を紹介しているに過ぎない。ハリウッドの草創期には移民して来た特定の人種グループが主導権を握って、娯楽という名目で、イデオロギーや信念を世界に拡散するために、映画を利用して来たのだった。その実態を知りたいければ、他の資料に当たる必要がある。² 米国人の信頼を得るに足るイデオロギーと信念を見つけ出し、娯楽映画に偽装してみせれば、金儲けのタネになることは間違いない。ハリウッド発のストーリーは、第一次世界大戦の後は倦怠に打ちのめされた社会と世界に冠たる米国という誇りを描写していた。ところが、第二次世界大戦の前になると、グローバリズムによって世界が救われるというように180度転換してしまった。その間の戦間期には、ハリウッドは、たとえば、ナチスを刺戟しないように気を使って映画を編集した。ドイツでは米国の映画が大人気だったから、上映できなくなったら大変なことだった。現在はどうかと言えば、中国共産党の機嫌を損ねないように一生懸命だ。なにしろ、中国と言えば、膨大なマーケットであるのだから。最後には、イデオロギーよりも金なのだ。ハリウッドは米国で生まれたとは言っても、今やまさしくグローバル企業なのである。

² N. ゲイブラー「ユダヤの帝国：ユダヤ人はどのようにしてハリウッドを発明したか」NY, NY: Anchor. 1989